

《第 502 回(2023 年 5 月 11 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:9 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

## 『パンに書かれた言葉』 朽木 祥/作 小学館

5月の読書会では、『パンに書かれた言葉』を読みました。光・S・エレオノーラという三つの名前を持つ少女の名前の意味を知る物語。彼女は、東日本大震災のあと、イタリアにいる母方の祖母の家に行きます。そこで、祖母から第二次世界大戦中にナチスの迫害にあった友だち・サラの話、パルチザンとして活動していた兄・パオロの話を聞きました。そして、夏休みには父方の祖父母がいる広島で、原爆で亡くなった祖父の妹・真美子の話を聞きます……。被爆 2 世である著者が紡ぐ物語です。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

\*\*\*\*\*

●ナチスとヒロシマの両方の話が一度に書かれている本は少ないのではないかと。どちらの祖父母も光に向き合って、つらい話をしてくれた。伝えていくことは必要なこと。戦争を体験した人が減っており、どんどん話が聞けなくなる。重い内容だったが、読んでよかった。

●広島の祖父母が、追悼行事は気がすまないと言っていたのが印象に残っている。当事者はしんどい。今もロシアのウクライナ侵攻がある。記憶に残して、ねじまげずに伝えていくことは大切だと思った。光の名前の「S」の意味を知るところで終わったことが救いだっただ。

●戦争を乗り越えてきた人々の希望をつないでいる物語。注釈もあり、丁寧な作りの本だと思った。注釈を見て、ホロコーストの意味を初めて知った。差別なく、命を大切にしたい。与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」の詩も考えさせられた。子どもたちに読んでもらいたい本。

●心に響く言葉が多かった。その場その場で忘れてしまいそうなのがきちんと書かれている。サラ、パオロ、真美子の日記を読むと、現実が襲ってきて、感情が揺さぶられる。言葉の力、希望を忘れてはいけないと思った。あとがきに、ウクライナの戦争のことが書かれているが、もし自分がウクライナや戦争のある時代に生まれていたらと考えた。

●情報量が多い本なので、読んだ後に話をする相手がいるといいと思った。伝えていけないといけない、が込められた本。正しく知ることは難しい。どちら側にも正義がある。この本を読んだことで、知る努力をし、これから先につなげていきたい。自分事として考えるきっかけにしたい。

●時代が変われば考え方も変わる。当時は、パルチザンを通報した人が拍手される時代。もし、自分がユダヤ人だったら、という言葉に考えさせられた。大切なことはなにか。母から高知空襲の話を聞く。これまで思ったことはなかったが、孫に伝えていかなければと思った。伝えないと誰も知らないままになる。

●ヒロシマもイタリアも、戦争があっても前に進んでいる。どんなことがあっても復活するエネルギーを信じたい。ただ、一人一人の声が届くうちに声をあげることが大切。自分の考えを暴力で通そうとしてはいけない。重い話は情報の与え方も大切。直接的ではなく、主人公が聞いた話として知る、この物語はよいと思った。

●イタリアでおばあちゃんが大戦中に経験したことは知らないことばかり。今も同じようなことが起きている。自分は広島出身なので、県外に出て原爆に関する無関心に驚いた。これから先を生きる世代が希望ある自由な人生を送ることができるよう、自分できちんと知り、考えていきたいと思った。

●第二次世界大戦もヒロシマでも大勢の人が亡くなっている。本文にあるように「名前でしかない人などいない」。数で見るとではなく、一人一人に生活があることを考え、相手を一人の人として見ることであれば銃を向けることはできない。相手を知る、関心を持って知る事の大切さを思った。

次回 6 月 8 日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『13 歳からの地政学 カイゾクとの地球儀航海』田中 孝幸/著 東洋経済新報社

※申込み・参加費は不要です。